



# このごろ思うこと

東京学芸大学名誉教授 理学博士

藍 尚 禮

昭和二十年の八月中旬に太平洋戦争が終わった。当時、旧制中学校（旧制とは中学四年で旧制の高等学校に進むことが出来る制度で、新制の大学に相当する学校に入ることが出来る制度でもある。その制度下の中学校という意味）の一年生として四月に入学した私は、戦後教育の「はしりとして」一冊の本を学校で手渡された。その表紙には大きく「民主主義」と印刷され、立派に製本された少々分厚い本であった。つまり戦後の最初の正規の国定教科書という訳である。表紙をめくると、本文の冒頭にはこう書かれていた。このことは今でも鮮やかに記憶している。アメリカの占領政策の一つだったのではないだろうかその本文の中で「民主主義のことを衆愚政治と唱える人々がいる」と民主主義を紹介するという一文が載っているのである。これまでは軍国主義、翼賛政治一辺倒。つまり反対する政治家、人物はこの国を滅ぼす以外の何物でもないと思えた時代が続いていた時代、それが180度変換し、自由、平等、そして国民一人ひとりが主権者であると言う本当にまぶしい国に変わったのだ。占領軍マッカーサーの終戦直後の中等教育への贈り物で「民主主義」とは素晴らしい考え方、思想なのだと思える第一歩。しかし、当時の私には何かしらこの文章の中の一語、衆愚政治という語が強く印象に残った。父親の机の上に無造作に置いてあった辞書を開いてみると、衆愚とは漢語的表現であり、その意味は多くの馬鹿者の意。そして民主主義を軽

蔑した表現で、すべて多数の意見に従うという民主的あり方に対して反対の考え方、と出ていた。今までの個人の考え方、ものの見方が全否定され、すべて「大日本帝國」のためという画一的な人間を創造する教育に埋没して育ってきた私には、この馬鹿者という言葉が強く脳裏に残ったものである。食べるものとして乏しい時代、学習のためのノート、鉛筆すら満足に手に入りづらく中学生の制服なども、都会の中学生には当然不足していた時代のことである。小学校で成績の良いものが級長。そして選挙で選ぶ名ばかりの自治委員というものがどういう方法でクラスの中で選ばれたものか、経緯は十分にわからぬまま中学校に進学、それも、第一志望の府立（今の都立のこと）の学校は三月の東京大空襲で焼けてしまい、入試中止となった。止むを得ず焼け残りの隣接の私立中学校に入学したと云う状況である。それ故、中学生の頭の中は、何が正義で何が邪悪なのかについては十分に評価できぬまま戦後の日々がすぎた訳である。その後、大学、大学院で選んだ専門分野を学ぶ生活から民主主義政治、自由、平等、権利を改めて考えるようになり、これを空気と同じ程に生活の基盤と考え、日常の仕事、生活に暮らしてきた。そこには安堵のできる生き方があって当たり前という安穩な生き方がくり返された。次第に世は生活への利便性の追求と利用に走り、それが社会の進歩、発展の証とし、社会の成熟と信じるようになり、平和な日々を送れる日本

となった今に至って、ふと自分の周辺を見てみると、以前には考えも及ばなかったさまざまな理に合わぬ事象に気づかされるようになった。殊に世の変化の速さにはついて行けぬことに気づくようになった。

そんなある日、今の日本という国にみちみちているのは、無責任な利己主義、自己中心主義、無制限の平等の主張、そして、独善的思考に満たされた権利の主張、それが政治、経済、社会の流れの中にみちみちて社会を大きくゆがめているのではないかと気付かされたのである。戦後の貧しい生活の中で、しかし個人の負うべき権利、義務の厳しさを人間生活の中で当然の掟と認識するようになると、これらはますます苦しくても守らねばならぬ生活規範だと教えられ、守ることを教えられてきた。そんな私にとって今日の社会は、まったく別の国の社会に思えてならないのである。そう思ったとき、ふと、頭の何処かに収まっていた「衆愚」という言葉が目の前に姿を現してきたのである。そうだ!! いま、われわれの周囲で日夜生起している事象の最も根源的な処に、この「衆愚」がむき出しになっているのではないだろうか? そう考えるとすべての事象に回答が与えられることに気づいたのである。主権在民はこの国で死滅してしまったのだと考えると、すべて合点がゆくのである。この社会の未来を考えるならば、先ず次の世代を担ってくれる人々に、丁寧な教育をすることである。明治維新の時代を作った先人たちは「富国強兵」と云う西欧列強に肩を並べる国にする国是の他、最も力を注いだのが「教育」だったのである。私はその炯眼に脱帽するのである。共通の教科書、標準となる言葉、標準を決め、誰もが正しい漢字を学び書けるよう教える。そのために教師は指導にあたっての指

針（教則）をしっかりと学ぶ。そして男子のみならず女子にも高等教育を保証し勤める制度を作り出すこと。これら「教育」を国の仕事と位置付けたことである。寺子屋で教えを授けられる恵まれた子女たちのみならずすべての子女に学校教育の機会を持ってもらう。現今の教育は、金がかかるから財政支出をほどほどに抑えたら良いという安易なやり方。これに反論すらせず、唯々諾々と安易な教育をする時代、それも少数の衆愚が決めてしまったという悲劇はこの国の行く末を容易に示している。本当の在るべき姿を見抜く力を持たれては政治がやりにくくなる。それなら見せかけは民主主義政治でも、少ない人間で勝手にことをすすめる方が効率が良いという訳である。独善的、自己中心的個人が充満し、議論しても何も決まらず無駄な時を過ごすならば、むしろ少数の人が限られた少数者の利益を守るためには都合が良くない。思い切って大きい変化を押し付ける方が効率が良いはずだということではなからうか? この国の政治は大きくゆがめられてしまった。まさに「衆愚政治」花盛りである。現今の衆愚にはいろいろの仕掛けもある。電子技術の応用で、教科書、ノート、鉛筆すべて不要。手元に配布のディスプレイで教師は電子黒板利用。文字の学習、読み、書きはすべてキーを押すことで完結する。教えることも辞書をひくこともすべて計算機、覚えることといたら手元のキーの扱い方押し方だけ。実物から学ばず、すべてバーチャル。教師も生徒も真の姿を学ぶことを忘れ電子玩具で遊ぶことにつつつを抜かすことが平成の進んだ教育であると言わんばかり。「教育」とは何か? 原点に戻って考えようとする人が、現今の指導層の中に居ないのだろうか。そう言えば戦後生まれの思想家は皆無の昨今、時を憂え、社会の

有り様を憂える指導層は見あたらない。終戦後、真の主権在民とその考え方に基づく政治は、本当に眩しく、深い闇の中から一気に明るい陽の野に出たような驚きとうれしさに感動したのは、ほんの七十年余り前のことだ。文頭に顔を出した民主主義のテキストで指摘のあった悪い〔衆愚政治〕をおそれた新しい考え方〔民主〕は容易にその手からこぼれ落ちることがあるのだとの記述はまさに当を得た正しい忠告といえることができよう。例えば、毎日の様にテレビで報じられている東京都の豊洲市場問題などは、コメンテーターも、司会者もすべて戦後の民主主義政治の恩恵を頭のとっぺんから足のつま先まで受けた人たちの筈なのに。市場新設工事に際しての安全無視の企てを誰が、いつ、ど

こで決めたかすら追求できないでいる。衆に問うて問題を論ずることなく、これこそ衆愚典型独断横行の例ではないだろうか？ 移転を計画した者も、建てた者もそしてそれら全体を企て実行を決めた者もすべてが不明という。計画は闇の中で進められたことへの反省。都には民主主義を唱える議会がありすべて民主教育を受けた筈の職員が仕事をすすめる都庁の中で誰一人責任も持たず感じずに、話し合いすら持たず、相談なしに公の財貨を多額投じ、取り返しのつかぬことをした訳だ。責任もとらずこの国、法治国を愚かな強権で動かすことの愚は私に戦前を思い出させるに十分である。この国の未来はどうなるのだろうか？ 私はそれを憂える。